

◇南京大学院生との研究交流会

実施日：2016年7月8日(金)

実施場所：明治大学グローバルフロント

◇参加記

博士前期課程2年 佐藤 兼理

学術交流のため、南京大学から斐和平先生をはじめ大学院生・PDの方々が明治大学に来校された。7月8日には、グローバルフロントにおいて、南京大の院生・PDの方々の研究発表が行われ、活発な議論が交わされた。

発表は院生3名とPD1名で、専門分野は考古学・歴史学・文化遺産学と多岐にわたり、発表内容も仏教の伝来から都市計画にまで及んだ。発表言語も、中国語だけでなく日本語・英語の3か国語であった。

最初の発表者は孫璨さん。主に建築工学の視点から文化遺産学を研究しており、今回は南京の明孝陵方城明楼と神功聖徳碑亭の修繕過程について発表された。2つの建造物の基礎が、雨水が浸食して損壊が進むのを防ぐために、すでに失われた方城明楼と碑亭の上屋などの復元を行う際の問題点の整理が報告された。復元する際の注意点は二つあり、できる限り原状態を維持することと、単体の建物よりも全体の空間的な配置を優先し、建築群として遺跡を保存することである。質疑で取り上げられたのは、内部を復元する際、文様や装飾の案をどのように策定したかであった。同時期の他の建造物を検討して定めるとのことで、日本と中国では優先事項の考え方に違いがあると感じた。

次の発表は張瀟さん。発表テーマは漢晋時代の仏教芸術の地域性研究である。中国全土を東北、中原東方、長江中・下流域、長江上流域、西域の5つの地域に分け、各地域の仏教芸術を比較研究したものである。仏像や仏塔だけでなく壁画、香炉、瓦など多くの資料を総合的に比較しており、特に鏡については日本との関わりにも言及された。「東アジア仏教」の起源や仏教伝来時の各地の交流関係の解明について議論がかわされ、日本の古墳時代との関わりにも注目が集まった。

休憩を挟んで、三番目の発表は葉帥さん。発表のテーマは出土遺物からみた中国東北地域における仏教の初伝である。中国東北地域から高句麗への仏教伝来ルートを経由する遺物や遺構、文字資料などから検討した。結論は、現在の河北省東部から遼寧省西部に4～5世紀に存在した燕が仏教伝来に大きな役割を果たしたというものであった。議論になったのは、伝来には複数のルートがあるという点であった。今回の発表は中でも最も有力なルートが提示されたものであった。仏教の伝来ルートについて現在でも活発な研



究が行われていることが、私たちにとって新鮮な刺激となった。

最後の発表はPDの晁舸さん。都市計画において歴史的な街並みの保護戦略を研究しており、特に歴史のある小さな農村の保護が専門である。発表では、中国における文化財保護の意識的な問題に焦点をあて、「文化財は保護すべき」という意識改革の必要性を説いた。はじめに、欧米諸国の文化財に対する哲学的な研究史を紹介し、実際に米脂という村で行われた実地調査の報告がなされた。議論の対象になったのは、現在そこに居住している人々との関係をどのように築いていくかであった。日本でも遺跡の保存には現地の方々と関係を築くことが最も重要な課題である。国によって事情も異なるが、保存に関する課題には共通することも多くあり、お互いの意見を交換することで双方に良い刺激となっていた。

休憩をはさんで4時間以上も研究発表が続き、南京大学との学術交流は時間を忘れるほどで興味深いものであった。

最後に私の所見を述べるが、4人の発表者のうち2人も仏教の伝来に関する研究であったことが印象に残った。日本にいと、中国では仏教伝来の研究はされ尽くしていると考えがちである。ところが、現在でも、若手の研究者の研究対象となっている。また、多くの研究が考古学的なアプローチを組み込んでいる点も私の興味を引き、多角的な研究が必須であることを再認識した。

今回このような形で研究成果を報告していただいた南京大学の方々には感謝申し上げたい。このような機会を設けていただいた先生方・関係者の方々にも深く御礼申し上げます。

◆フィールドワーク ◇奈良（総合史学研究Ⅱ）プログラム

実施日：2016年6月3日（金）

参加人数：学生3名、引率教員4名、合計7名

実施場所：奈良県飛鳥・藤原京エリアの史跡等

◇参加記

博士前期課程1年 高橋典子

総合史学研究Ⅱでは、考古・史学・文学をご専門とされる先生方の下、各専攻の博士前期課程の生徒が日本古代について幅広く学んでいる。今回、授業の一環として、先生方と共に奈良県飛鳥・藤原京エリアの史跡等を巡見した。

まず、耳成山や香久山、畝傍山といった山々に囲まれた、藤原京のあったとされる場所を車で進んだ。その広大さに驚かされながら、藤原宮大極殿を過ぎて、橿原市藤原宮跡資料館を見学。それから、奈良文化財研究所の飛鳥・藤原庁舎にて、木簡に関するお話をうかがった。私のテーマである医療にも関係する、葉の名の記された木簡を見られたのは貴重な経験であった。さらに、弥生時代の遺構と藤原京の遺構とが同じ場所で発掘されている、実際の調査現場を見学することができた。普段現物史資料に触れることもなく、発掘調査に参加することもない私にとって、報告書等で記されるものが目の前に広がっているという景色はとても刺激的であった。

柿本人麻呂の句の残る雷丘を通ると、飛鳥板蓋宮跡伝承地へ。酒船石遺跡のある丘陵にものぼり、飛鳥の風を感じたところで、古代の水時計とされる漏刻のあった水落遺跡と、石造物の発見された石神遺跡を訪れた。か

つてここには何が、何が行われていたのか。未だ謎の多い遺跡に興味をかきたてられる。豊浦宮跡では、石敷を伴う掘立柱建物跡を見ることができた。次いで向かった飛鳥資料館では、石神遺跡で発見された古代の噴水とされる石人像などのレプリカが出迎えてくれた。こういったものが行動圏内にあることを容認していたらしい古代の人々との遠さを感じるその一方で、個人的に一番目を奪われたのもこの石人像であった。その後も地中に埋もれていた東回廊が発見された山田寺跡、十三重の石塔の残る檜隅寺跡、国营飛鳥歴史公園として整備されたキトラ古墳、御園遺跡の発掘現場を見て回った。

今回の巡見を通して、どの分野を学ぶにしても、研究の舞台となるまさにその場所を実際に訪れ、また

ものに触れるというのはとても重要なことであると改めて感じた。世界遺産登録をはじめ、当該エリアは、国内にとどまらず世界にその価値を発信していこうとしている。今、こうしてじっくりと飛鳥・藤原を巡見し、学ぶことができたのは、有り難い機会であった。

最後に、お世話になった先生方、関係者の方々に、この場を借りてお礼を申し上げ、結びとしたい。



◇高麗大学校プログラム

実施日：2016年9月5日(月)～9日(金) 4泊5日

参加人数：学生5名、教員5名、合計10名

実施場所：韓国・ソウル市

<高麗大学校プログラム・フィールド調査日程概要>

9/5 午後羽田空港より出発、金浦空港到着。

9/6.7 高麗大にて学術交流大会

9/8 奎章閣、蔵書閣見学

9/9 国立中央博物館、国立ハンゲル博物館見学

金浦空港より出発、羽田空港到着



◇参加記

博士前期課程1年 沢野誠

9月5日から9日にわたり、今年度の高麗大学校のプログラムが行われた。今年度の参加者は、文学・史学を専攻する学生5名、先生方5名の計10名であった。学術発表とフィールドワーク、どちらにおいても大変充実した体験となった。以下、プログラムの概要について記す。

5日に現地に到着し、6日、7日の両日に渡って、「第七回 明治大学・高麗大学校 国際学術会議」が行われた。「東アジア文学と歴史の新たな照明」と銘打たれた今回の学術交流では、6日が文学分野、7日が歴史分野の基調講演・企画主題発表がなされ、活発な議論が展開された。日本や韓国を始めとする東アジアの文学・史学を横断する発表、議論の数々に圧倒されつつも、大きな学びを得ることができた。



私は故事成語「助長」についての成立背景、日本と中国の差異について研究発表した。その際、考えなければならぬのは、中国と日本の文化の比較、そして交流の検討であった。中国からどのように書物や言葉が輸入され、どのような変化を経て現在の形へたどり着いたのかという考察

には、中国とは異なる日本の文化や日本人の思考が底辺に存在することを無視できないからである。しかし、今回の学術交流で、地理的にこの二国の間にあり、歴史的に二国の交流の媒介ともなった朝鮮半島の存在を忘れることはできないことを認識させられた。これは質疑応答に際して、韓国における『助長』の使用状況について貴重なご意見をいただいたことによる。現在韓国では「助長」は中国と同じように使用されているとのことであった。つまりこれにより、日本の『助長』使用法が際立つ結果となった。今回私は「言葉」に注目して、中国と日本を比較検討したが、私の検討には、その経路を辿ったときに媒介となった朝鮮半島の存在を見ていなかったことを痛感するとともに、日本の文化、文学、歴史を考える際には、中国と日本のみを考察の対象に入れるのではなく、韓国を始め、東アジア文化圏全体を含んでいかなければならないと考えた。

私の発表にも言えることだが、文学や歴史、言葉や文化を比較することは、差異を見つけることに重きを置きがちである。しかしながら6日の最後に挨拶された高麗大学校の崔貴黙先生が、「比較文学とは普遍性をみつけることだ」とのべられていたことが心に残った。差異をみつけることで普遍性が見えてくる。一方で普遍性を見つけることで差異も発見できる。東アジア文化圏の共同体として、共通する部分は多いはずである。研究において、日本と中国、そして東アジア文化圏における普遍性と差異を見つけていくことが私の使命であることを認識した。

8日は奎章閣、蔵書閣を訪れた。奎章閣は1776年に朝鮮の22代国王・正祖が創設したもので、歴代宣王の直筆・著述、遺品、国内外の書籍を収集保管・管理する国立図書館の機能を果たしている施設である。今回ここでは白氏文集を始めとする貴重な文献を見せていただき、得難い経験となった。特にハングルで書き込みのある漢籍に非常に関心を持った。マイクロフィルムやインターネットでの公開など、我々が貴重な文献を平易に見るための技術は進んでいるが、やはり本物を触り、見て、感じることは及ばない。五感を使って歴史的価値を有する史料に対面できたことは何よりの喜びであった。また、常設展示室においても、多くの史料を見ることができた。



蔵書閣は1918年に、朝鮮王室と財産にかかわる業務を担当していた李王職が、昌徳宮に設けられた李王職図書室の書庫に「蔵書閣」の扁額を掛けていたことに始まり、現在では約15万点の国家王室文献および民間士大夫文献を保存している施設である。ここでは、貴重な史料の修復を行っている様子を見学させていただいた。このように奎章閣と蔵書閣では、韓国における貴重書の保存方法を知ることができた。これらの保存技術は、日本に倣ったものも多いという。東アジア文化圏に共有されるのは、その保存技術に至るまでであることに感動した。



9日は国立中央博物館、そして国立ハングル博物館を訪れた。国立中央博物館では特別展として、ハングルの活字の展示が行われていた。朝鮮時代の金属活字である甲寅字、實録字、整理字や木活字など、多くの活字が整理された状態で展示されていた。国立ハングル博物館では、ハングルがどのような意図により生み出されたもので、どのように成立していったのかを丁寧に説明していただき、言語学の世界からも高い評価を受けるハングルの独創性、科学性に関心を持った。



フィールドワークを通じて、朝鮮王朝の貴重な文献や韓国の言語の歴史に触れることができた。そして改めて日本の文学、歴史、言語、文化、思想について考え直すきっかけになった。日本を相対として見ることで、改めて考え直すことも多い。学術交流・フィールドワークの双方で、東アジア文化圏の普遍性と差異を見つめることができた。この実りを今後の研究へ生かしていきたい。

◇第7回明治大学・高麗大学校国際学術会議

実施日：2016年9月6日（火）～7日（水）

場 所：韓国・ソウル市（高麗大学校・民俗文化研究院）

◇参加記

博士後期課程3年 木村愛美

2016年9月6日～7日にかけて、第7回明治大学・高麗大学校国際学術会議が開催された。テーマは「東アジア文学と歴史の新たな照明」である。9月6日は開会式ののち、基調講演およびA組企画主題発表が行われ、7日は基調講演およびB組企画主題発表が行われたのち、閉会式が開かれた。2日間とも高麗大学校内の伝統的な建築で造られた民族文化研究院で行われた。

基調講演は、6日は明治大学・高麗大学からそれぞれ2人の先生方が、7日も両校からそれぞれ2人の先生方が講演された。私は文学を専門としているため、これまであまり触れる機会がなかった歴史学の発表を拝見することができた。時代も国も違っていることから、これまで自分の研究とはほとんど関係がないと思って見過ごしてきたのだが、発表を聞いているうちに、自身の研究とリンクする内容があり驚いた。研究を続けていくと専門のことにばかり意識が向いてしまって、それ以外のことに対する視野が狭くなってしまっていたことに気が付いた。



A組企画発表は、文学の分野から、明治大学3名、高麗大学校11名が参加した。B組企画発表は、歴史の分野から、明治大学3人、高麗大学校4人が参加した。

企画発表は、おもに2人1組となり、発表と質疑応答を行う。両者の研究する専門分野や時代は必ずしも同じもの

ではなく、これまでに踏み込んだことのない領域に当初は戸惑う様子も見られたが、相手の発表を聞き、自分の研究に引き付けて質問することで充実した時間となったようだった。私も、また2人1組となった相手方と研究する分野が違ってはいるものの、時代が近いこともあって新鮮に感じた。その発表は、日本と韓国の歴史を考慮したものであり、とても勉強になった。また、私の発表に対しては、相手の方の専門的な視点からの質問があり、新しい視点で自身の研究を考える貴重な機会となった。

この2日間の交流は、日本語、韓国語、英語などの多言語で行われ、「国際学術会議」という名にふさわしいものになった。今後ますますグローバル化は進み、アジアの文学・歴史学は、アジアだけに留まらず、国際的な交流が増していくと考えられる。今回の交流は、そういった未来のさきがけとなる貴重な時間であった。



◆ 2016年度プログラム（前期）の軌跡

2016/4/6	新入生ガイダンス
2016/4/22	運営委員会
2016/7/15	運営委員会
2016/9/5-9	高麗大学校プログラム（4泊5日）

明治大学 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

日本古代学教育・研究センター：猿楽町第二校舎3階 TEL・FAX：03-3296-4492

Eメール jkodaken@meiji.ac.jp

ホームページ http://www.meiji.ac.jp/dai_in/arts-letters/jkodaken

教務事務部大学院事務室：グローバルフロント5階 TEL：03-3296-4143 FAX：03-3296-4352